

送りバントをした場合としない場合の得点期待値の差異について

－日本のプロ野球公式戦を対象として－

及川 研・佐藤 精一

運動学

抄録

日本の野球界で基本的戦術とされてきた送りバントについて、真に有効かどうかを検討する資料を得るために、バント数の日米の比較や、安打・得点とバント数との関連の検討を行った上で、『無死1塁または2塁の走者を送りバントで進めた場合の得点期待値は、送りバントを行わなかった場合に比べて低くなる』という仮説の検証を試みる。分析には、2005年の日本プロ野球公式戦の通算記録及び前半戦432試合のスコアを利用する。

日本プロ野球公式戦の1試合あたりのバント数はセ・リーグで0.64、パ・リーグで0.55だが、アメリカメジャーリーグでは0.33であり、日本の約半分しかなかった。

日本のプロ野球公式戦記録からみると、送りバントを多用するチームでは、安打数の割には得点があがらない傾向があることがわかった。

送りバントの有無による得点期待値の差の検討を行ったところ、「送りバントあり」で0.91、「送りバントなし」で1.06となり「送りバントなし」のケースの方が得点期待値が大きくなることがわかった。さらに、細かい状況別の分析の結果、試合の終盤での送りバント、得点差が2点以内の場合の送りバント、2番打者の送りバントなども、「バントなし」に比べて期待値が小さくなることがわかった。

チーム別の傾向の検討では、「送りバントあり」の場合の得点期待値が有意に低く、「送りバントなし」の場合の半分程度となっているチームが少なからずあることがわかった。

以上のような結果から、送りバントの使い方を再考する必要があると思われる。